
そして勇者は死んだ～名も無き者達の魔王退治～

田村狸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして勇者は死んだ〜名も無き者達の魔王退治〜

【Nコード】

NO109BA

【作者名】

田村狸

【あらすじ】

貧しい少年は成長して勇者となり、魔王を倒して国を救った。そうなるはずだった。しかし勇者一行は辺境の地で土砂崩れに巻き込まれ死体となって発見された。このままでは国が滅ぶ。でも、その前に父が処刑されるだろう。田舎の荘園領主の息子レイディアスは、領地と国と自らとを守るため、王国の命運をかけた騒動へと身を投じていく。

王道ファンタジーになり損ねた感がありますが、一応王道を目指し

ます。「深淵の哀悼歌」の本編となる予定です。

プロローグ（前書き）

「深淵の追悼歌」の本編、子供世代編です。まったり更新、の予定。
誤字脱字報告大歓迎です。

プロローグ

やまないな。

レイディアスは執務机に行儀悪く頬づえをつき、窓の外を眺めやうた。視界は重苦しい灰色に塗り固められている。もうじき収穫だというのに昨晩からずっと降り続けている雨が、地面に行く筋もの川を造っていた。

異常気象。これも魔王が現れたせいなのだろうか。今年も飢饉だったら蓄えが危ないかもしれないと胃が痛くなる。

まるで滝つぼにいるかのような激しい雨音がレイディアスの憂鬱を増長させた。屋内にいるのにじっとりと湿った髪がうつむいた顔に降りかかる。

彼の髪は、複雑で珍しい色をしている。何処の遺伝がどう出たのか、よくよく見れば一本一本は銀だったり淡い金や栗色だったりするのだが、全体で見ると、冬の曇天に照らされた落ち葉のような銀桃色に見える。乳母は美しいというが、彼はこの髪が嫌いだった。白い肌や冷たい青灰色の瞳と相まって、酷く寒々しいような気がするからだ。　　気だるげに前髪を払いのける。

遠くでまた、雷が鳴った。

土砂崩れの可能性がある。内心億劫なのを押し隠し、書類を押しやって立ち上がった。

「見回りに行ってくる」

「こんな日にでございますか」

初老の執事が怪訝そうに問い返した。彼は領地を持たない下級騎士で10年ほど前から我が家に仕えている。

「こんな日だからだ。街道の様子が気になる。ノーリス、父上はまだ留守か」

「はい。騎士館の方での打ち合わせが長引くかもしれないと先ほど伝言がありました」

「そうか」

また面倒でもあったのだろうか。父は領主とはいつてもこの土地では新参者に過ぎない。いろいろと複雑なのだろうと眉をしかめた。

「外は寒うございます。今外套をお持ちいたしましょう」

中だつて寒い。レイディアスは一人ごちた。

我が家であるこの領主館は、辺境の小さな荘園に相応しく貧しくつつましい。暖炉の薪を節約しているのに、形だけは大きく、修理も行き届いていないためこの時期は酷く冷えるのだ。

外套の中に腰まである髪を突っ込んで玄関へ向かうと、ちょうどそこへ少年が飛び込んできた。年の頃12、3歳の、亜麻色の髪

にはしばみ色の瞳をした少年だ。全身をしとどに濡らし、息を切らしている。

「どうした、ミリアス」

「大変です、すぐ来てください。死体が・・・」

死体。物騒な言葉に緊張が走った。執事と顔を見合わせる。

「落ち着いて話せ。何があつたんだ」

「と、父さんが、街道で、埋まつてる人達を見つけたんです。崖が崩れたみたいで、生きてるのが良くわからなくて・・・何人かは死体みたいなんですけど・・・」

やはり、崩れたか。遅きに失したことにレイディアスは唇を噛む。

「それで、イエルノーは今何処に」

「父さんは、その人たちを掘り出してます」

「わかった、すぐに行く。ノーリス、手の空いた使用人たちを集めてくれ」

助かってくれればいいが。悪魔のような雨雲を睨み、もう何度目か分からないため息をついた。

プロローグ2（前書き）

分けたけど・・・一つにまとめても良かったような気がします。

プロローグ2

ミアスの案内のもとたどり着いた現場には、すでに5人が掘り出され、横たえられていた。

率いてきた使用人たちにまだ人がいないか探すように命じると、一見して生命のないことが分かる彼らに近寄る。彼らは、金のかかった服装をしていた。取り立てて豪華ではないが、質のよい生地や装備品は、このあたりを良く通る行商人や普通の旅人のものでは有り得ない。いやな予感がする。

レイディアスは遺体をもつとよく見ようと屈み込む。男が4人、女が一人。いずれもまだ若いように見える。

男のうち二人は、双子だろうか、ほとんど同じ顔をしていた。20代の後半か30代のはじめほどで、黒い髪に、豊かな体躯。ただ服の色だけが違う。腰には真っ直ぐな諸刃の剣を帯びている。刃を抜き出すと、厚く重いのがわかった。根元に天秤の模様が入っている。騎士だ。それもおそらくこのあたりの出身。

女は少女といえるような年齢だった。金の巻き毛に愛らしい造作をしているが、そのみどりの瞳は、見開かれたままうつろに空を見上げている。彼は死体など見慣れていた。今の世にあってはそう珍しいものではない。それでも痛ましいと思った。そっと目を閉じてやる。隣に横たえられた青年の顔に視線をやり、息を飲んだ。

咄嗟に周囲を見渡し、誰もこちらに注目していないのを確かめる。まさか。何てことだ。レイディアスはわきあがる混乱と恐怖を何とか抑えようとした。見間違えであってくれと願うが、何度確かめて

も目の前の現実は変わらない。

蜂蜜色の巻き毛。緑柱石の瞳。精悍で整った顔立ちに鍛え抜かれた瘦躯の20代半ばの青年。

ラグナス。

レイディアスは彼を知っていた。間違えようはずもない、彼は隣の出身だった。かつて机を並べ、屈折した感情を抱いていた相手だ。

にわかには信じがたい、けれどこれは現実なのだ。伯爵家の養子となり、魔王を討伐すべき勇者となったこの青年が、今こんな場所で死体になっている。ということは、共にいた者たちは噂に名高き勇者一行なのだろう。

身の内から寒気が這い上がる。頭から血の気が引いて、地面に片腕をついた。

「大丈夫ですか」

近づいてきたイエルノーが心配そうに問いかけた。

「平気だ。お前は何か気付いたか」

「何かって、仏さんのことですか。どうも、ただの平民には見えませんでしたが・・・」

じろりと睨みつけると、イエルノーは視線をそらしてたじろいだ。

「財布なんて盗んでません。本当です」

「そうか。彼らは商人・・・金貸しと娘とその護衛だったらしい。懐からどっさり証文が出てきた。だが、あまり公言できない客の名があったのだ。だからいいというまで、このことは他言無用だ。息子にもそう伝えておけ」

「そうですか。わかりやした」

背を向けた羊飼いの男になおも鋭いまなざしを向けた後、レイディアスは外套を脱ぐとラグナス等の頭部にかぶせた。

結局その後、生存者は見つからなかった。

男性5名、女性2名。計7名の遺体は、レイディアスが聞き知っていた勇者一行の数とぴたりと一致するものだった。

レイディアスは使用人達にも先ほどイエルノーに話したのと同じ嘘をつく、緘口令を敷いて遺体を地下のワイン倉に運びこんで凍結の魔法をかける。
そ

れから騎士館にいる父のもとにすぐ帰るよう使者を送った。

勇者一行が魔王を倒す前に土砂崩れで全滅するなど笑い話にもならない。

実際、これは笑い事ではないのだ。魔王が倒されなければ、災害も魔物も収まらない。次に勇者が生まれるまでの十数年か、ひよつとしたら数十年の間、この状況を耐え忍ぶことになる。それ以前に、

希望の象徴たる勇者が死んだことが明るみになれば、民は暴動を起すだろう。

かつてそうして滅んだ国の話を、レイディアスは史書で読んだことがあった。そしてそれは、今まさに我が身に降りかかるうとして
いるのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0109ba/>

そして勇者は死んだ～名も無き者達の魔王退治～

2011年12月31日04時52分発行